

愛會を中心とする神戸労働組合聯合團に赴けるの跡、必然なるもの、如くに倚據するに到りたりとも見得べく或は又内に工場の一部屬にして尙數千に達する事とて、立てるものは其統制上必然に傳統的勢力の下に據らざるを得ざりしとも言ひ得るなるべし。兎に角多くの理論なくして各部は友愛會中心の「組合聯合團」に赴きたり。

然らば思想的に人的に、三菱、川崎の労働者は友愛會及其の勢力を成せる中心人物に欽仰せしや如何、此點に關しては第十一回報告、第十一項に於て若干之に觸れるところありたれば多く、茲に贅せず、労働者の重立ちたるもの、内思想的には、賀川氏の所謂無抵抗の罷業論に懼らざるものあり、且久留弘三氏の指導者の態度に對しても満足せず「労働者のことは労働者自身にて處理せん」てふ空氣の必ずしも微弱ならざるものありき、而も尙賀川、久留兩氏が全軍の采配を預れる形を呈するに到りたるものは、傳統的勢力に對する大衆の信頼は其一なり、各組合の幹部となれるものは一度友愛會の會員たりしもの多く、そこに精神的共通點のありしこと其二なり、友愛會に闘主の多かりしこと其三なり大同團結をなすに非れば如何ともなし能はざる状態なりしこと其四なり、而して其四は最も重要なものなるべし。

傳統的勢力を分解せば、經營者は労働者以外の分の爭議に混入するを排斥することに尋常ならざるものありながら労働者を對談の相手として相當の尊敬を拂はず、智識階級の發言に敬意を表するもの自家撞着を取てし、社會も亦智識階級に信頼するを以て必然に智識階級に倚ることとなるの外、神戸のそれには特殊の事情あり、乞ふ賀川豊彦氏を以て説明せしめよ、氏は曰く「神戸は私の村である、私の家である。神戸の労働者の或るものは信者として私の説教を聴き、或る者は夜學校の生徒として私から習つた。大多数は私の友人として私の演説の聴衆である。其人々のすべてが、勿論私と説を同じうするとは言はない、が彼等はどうな事があつても私から捨てられないことを知つて居り、私も亦彼等が私を捨てることのないのを信ずる。お互に腹の底から信頼し合つて居る。労働運動は理論でない。信頼である。そして信頼し合つた者同志が、お互の家である神戸で經營者と争ふと言ふことは、他に實例のない點である」と。又味ふべき言ならずとせず。而も他の一面に、如何なる場合、如何なる人をも疑はざる賀川氏は、たとへ労働者が絶對の信頼は氏に拂はざることありとするも我から誠を捧げ、あらゆるものを堵して一意之に盡すの親切はやがて氏に對して不知々々の間に其信頼をして絶對的ならざるに至らしめぬ。

爭議各部に對する友愛會神戸聯合會長野倉萬治氏の威信徹底せず、賀川氏に依りて野倉氏の地位全かりしを思ふとき、三萬の労働者が神戸友愛會に采配を預くるに到れるものは情勢の必然と「賀川豊彦」なる一人格に歸せざるを得ず。神戸聯合會に於ける五つの柱は賀川豊彦、久留弘三、須々木順一（關西労働同盟會長）木村錠吉（前同）野倉萬治（神戸聯合會長）にして尙幾多の遊星あり、而して主務